FileNo.003：綺麗ナ口裂ケ女

黒猫又

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｆｉｌｅ Ｎｏ．００３：綺麗ナ口裂ケ女

【Ｎコード】
Ｎ２５５３Ｅ

【作者名】
黒猫又

【あらすじ】
昭和６３年、季節は夏を夏を迎えようとしていた。此処は山と海に囲まれたとある街、黄昏市。市街地から離れた暁村がこの物語の舞台となる。村ではある日を境に不可解な事件が続いていた。二年に一度――――村の誰かが死ぬ。ならば、今年死ぬのは果たして誰なのか。暁村に纏わる惨劇は此処から始まる。いや、或いは１２年前のあの日から、この惨劇は既に始まっていたのかも知れない…。

（前書き）

注意：本文は場面によって残酷な描写があります。
尚、これは本編ではなく都市伝説となります。

紅月村に関する情報が必要な際はこちらまで。
ｈｔｔｐ：／／ｂｌａｃｋｃａｔｈｕｔ．ｗｅｂ．ｆｃ２．ｃｏｍ／ｈｏｒｒｏｒ／ｈｏｒｒｏｒ．ｈｔｍｌ

それでは、紅月村の世界を堪能ください。

これは友達の友達から聞いた話なのですが――――――

ＦｉｌｅＮｏ．００３：綺麗ナ口裂ケ女

暁村がまだ紅月村として名を残していた頃のことだ。
当時の僕にとって音とは情報であり、同時に世界だった。
緑の山々に囲まれるように在る街、黄昏市、市街。
街は今、市街を中心とした都市開発を推し進めていた。
僕の通う学校も都市開発の一端ということになる。
この学校は身体に障害を持つ子供達の為に作られた、
云わば児童障害者用の施設ようなものだった。
一般の市立中学校に通えない児童達を考慮して

市が都市開発を進行する際に建てたとされている。
故に在籍している生徒達の殆どは身体に障害を持ち、
この学校での教育と受けているということになるだろう。
障害とは言え、その状態は生徒一人一人によって異なる。
生まれた瞬間から視覚を失い、盲目の者。
育つ過程で聴覚を失い、補聴器を付けている者。
声帯に異常をきたし、言葉を発することが出来ない者。
不幸な事故に巻き込まれ、腕や足を失った者。
事故により脊髄を損傷し、車椅子生活を余儀なくされた者。
怪我、病気、火傷、細かく挙げれば限がない。
そんな彼らが凡そ普通と呼ばれる中学校に通えば
どんな三年間を過ごすのかは目に見えている。
必ずしも楽しい学園生活を送れるとは限らない。
待っているのは恐らく、地獄のような三年間だ。
耳が聞こえないことを良いことに汚い言葉で侮蔑され、

目が見えないことを良いことに足を引っ掛けられる。
例え感染症でなくても病気と分かると近付きもしない。
何れは中傷の的となり、非難の対象となるだろう。
どれだけ教師が生徒を諌めたところでそれには限界がある。
仮に教師の言葉で苛めが止んだとしても
それは一時的なもので気休め以外の何物でもない。
いや、教師が見てないところで陰湿な苛めは続くだろう。
どちらにせよ対等な目線で話してくれたり、
平等に接してくれる生徒は極少数だけだ。
嘗ての学校で、僕がそうだったように。
そんなこともあり僕は他県の学校を離れ、
数ヶ月前にこの黄昏市に学校に転校してきた。
入学当初から口に出せない不安を胸に抱えたまま。
前の学校と同じことが繰り返されるんじゃないか？
また気持ち悪いと、気味が悪いと言われるんじゃないか？

そう考えれば考えるほど胸が押し潰されそうなくらい怖くて。
そんな不安を拭い去ってくれたのは
他でもない教室のクラスメイトの言葉だった。
「初めまして、確か・・・篠本悠君、だっけ？
転校初日で難しいかも知れないけどこれから仲良くしてねっ！」
「分からないことがあったらどんどん聞いてねー。
学校案内するのは難しいけど一通り教えるからさー。」
「・・・・・！・・・・・！」
「悪い悪い、コイツちょい話せねえんだわ。
まぁ多分よろしくって言ってんだと思う。
ってな訳で俺のこともこれからよろしくな！」
そうやって僕の肩を叩いてくれたのは、冷たい義手だった。
・・・・・気付いたら、涙が溢れていた。
クラスメイトは怯える僕を温かく迎えてくれて。
分け隔てなく話せる、接してくれる。

そんな当たり前のことがどうしようもないくらい嬉しくて。
入学当初はよく家に帰って泣いたのを覚えている。
そんな彼らが集まる教室には今、ある噂が浸透しつつあった。

「ねえ、聞いた？最近街に出るっていう口裂け女！」
「知ってるよー、隣の教室はその噂で持ちきりだったしねー。」
「・・・・・！・・・・！・・・・・・・！！」
「よしよし、俺にはお前の言いたいことが分かるぞ。
何ぃ？一目会った時から俺のことが好グハァ！？」
「あはは、そんなこと言ってないってさっ！」
「てゆーか、びっくりするくらいポジティブな捉え方だよねー。」
「お、お前ら、普通そこまで言うかぁあああああああ！？」
そうして皆で馬鹿みたいに笑い合う。
僕も笑いながら、しかし、頭では別のことを考えていた。

この学校に瞬く間に広まった噂、口裂け女。
単語を聞く限りどんな姿なのか想像するのは容易だが、
実際に目撃したという者が居ないというのは奇妙な話だった。
いや、噂とは本来そういうものなのかも知れない。
噂はあくまで単なる噂でしかないのだから。
今回もそれと同様に噂に尾びれが付いただけなのだろう。
信憑性の低さや目撃者の少なさからか、
結局僕はその噂話を信じることが出来ずにいた。
だが、放課後を迎えた後も教室にはあの噂が広がり続けている。
その影響なのか、校内は慌しい空気に包まれていた。
廊下を駆け回る教師達の足音が教室に響き、
その度に教室内にざわめきが起こる。
すると、息も整えないまま担任の教師が戻ってきた。
「何かあったのかな？」
僕は隣の席に座る少女に尋ねた。

「うーん、分かんないけどやっぱり事件じゃない？」
「そういやさっき職員室の前を通ったら
担任が校長に向かって口裂け女の話をしてたぞ。」
「・・・・！？・・・・！」
「口裂け女の噂が広まり過ぎたからねー。
もしかしたら保護者から苦情があったのかもー。」
「ハイ皆静かにー！そこ、騒いでないで席に着く！
今から大事なことを話すので先生の話をよく聞いてね。」
担任の言葉に教室中の生徒が注目する。
「これから先生は職員室で職員会議があるので
皆は速やかにお家に帰るように。
寄り道なんかしたら絶対駄目ですからね？
それとお父さんお母さんが迎えに来てくれる人は
なるべく車で迎えに来てもらってください。
そうでない人も真っ直ぐお家に帰るように。」

その言葉に僕はある違和感を感じた。
単なる噂の沈静化になら保護者の迎えは要らないのでは？
「やっぱり、何かあったんじゃ・・・？」
「心配すんなって、どうせ俺らには関係ねえよ。
それに本当に口裂け女が出てもコレがあるしな。
お前も持ってろよ、念には念を入れろってね。」
手渡されたのは平たい飴玉だった。
「・・・うん、ありがとう。」
飴をポケットに仕舞うと、四人に別れを告げる。
両親が共働きをしている以上、僕は歩くしかない。
未だに担任の言葉に違和感を持っていた僕は
その日は何時もより早足に自宅へと向かっていた。
この周辺も都市開発の影響が及んでいるのだろう。
歩道はところどころ砂利道が続き、
どうやら補整されている途中のようだった。

「ねえ君。」

静かな、それでいて耳の奥にまで響く声。

不意に投げかけられたその声に僕は足を止めた。

声の主へ振り向くと小さな息遣いが耳に届く。

「――――私、綺麗？」

女性の急な問いかけの意味を理解するのと、

脳裏にあの噂が浮かんだのはほぼ同時だった。

シャキン

・・・・・・・・・しまった。

そう、気付いた時にはもう手遅れだ。

半信半疑だったので気にも留めなかったが間違いない。

噂の主――――口裂け女が現れたのだ。

こんなことなら多少遠回りしても大通りから帰るべきだった。

それだけではない、あの噂もよく聞いておくべきだった。
くそッ！何か、今からでも何かやれることはある筈だッ！
大声を出して叫んでみるのはどうだ？
いや、そんなことをすれば逆上してしまうかも知れない。
ただでさえ一目につかない細い道だ。
人が駆けつけるまでに時間が掛かり過ぎる。
例え叫んでもその間に殺されてしまう可能性の方が高い。
シャキン　シャキン
なら一か八か全力で逃げてみるのは？
いや、そんな選択肢は選べない。
ただでさえ普段通ることのないこの道、
それが歩き慣れない砂利道となれば尚更だ。
考える間にも何かが擦れ合うような音が響く。
シャキン　シャキン　シャキン
さっきから・・・・一体何なんだこの音はッ！！

冷静に考えようとすればするほど
鋭い金属音が僕の頭の中を掻き乱していった。
音からして金属音には違いないだろう。
金属が擦れる音・・・・・・まさか、鋏ッ！？
背筋に冷たい汗が伝うのが分かる。
僕は震える拳を握り締め、恐る恐る口を開いた。
「・・・・分かんない。」
震える喉から搾り出した声は、思ったよりもずっと小さい。
だが、今の僕にはそう答えるしかなかった。
「じゃあこれなら・・・・・・・・どう？」
女性は嬉しそうに再び聞き返してくる。
シャキン　シャキン　シャキン　シャキン　シャキン　シャキン
シャキン　シャキン　シャキン　シャキン　シャキン　シャキン
その間にも狂ったように鳴り響く金属音が僕の恐怖を掻き立てた。
だが、どんなことをしようが結果は同じだ。

僕は女性の望む答えを持ち合わせていないのだから。
半ば開き直った僕は、女性に正直に話すことにした。
本人には見えず、誰にも見せたくない僕の障害を。
「ごめんね、やっぱり分かんないよ。
僕は――――――生まれつき目が見えないから。」
ゆっくりとサングラスをとって見せる。
「あ・・・・」
女性の言葉はそこまでだった。
彼女が口を閉ざした理由は自分でもよく分かっている。
まだ黄昏市に引っ越す前、前の学校に通学していた頃、
クラスメイトが冗談半分でサングラスを奪い取った時があった。
周りの女子生徒が甲高い悲鳴を上げたことから
余程酷い状態なのだろうと自分でも予想はついていた。
「ごめ・・・ごめんなさ・・・・」
耳を澄ますと女性は消え入りそうな声で謝っていた。

「・・・お姉さんが気にするじゃないよ。」

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい・・・！！」

再びサングラスを付けながら考えていた。

やはり悪いことをしたかも知れない。

先程までの恐怖は去り、今では罪悪感さえ芽生えていた。

傍にいる女性がどんな顔をしているかは見えないが、

女性は相変わらず嗚咽混じりの声で謝り続けている。

こっちが悲しくなるくらい弱弱しく、すすり泣きながら。

分かっていたことなのに。

僕に泣かせるつもりはなくても、この目は人を傷つけるから。

彼女は何も悪くないのに、この目は人を責めるから。

そんな彼女に向かって僕は考えられる精一杯の言葉を紡いだ。

「お姉さんは、綺麗だよ。」

言いながら笑う僕に、女性が意外そうな声をあげた。
それにも構わず僕は続ける。
あの時クラスメイトから投げかけられた言葉の、
そのほんの少しでも優しさを分けてあげられるように。
「見知らぬ僕なんかの為に泣いてくれるお姉さんは、
きっと・・・・心の優しい、綺麗な人だと思うんだ。
だから、もう泣かないでよ。
このことで、お姉さんが謝る必要なんてないんだから。」
そんな悲しそうな顔をする必要はないと。
そんな寂しそうな声で泣かないでいいと。
女性に言い聞かせるように僕は何度も続けた。
「女の人は笑っている顔が一番綺麗なんだって。
僕には分からないけど、お姉さんだってきっとそうだよ。」
「うあ、ぅ・・・あぅ、うっ・・・・・！！」
それでも尚、嗚咽を漏らしながら泣く声に

僕の女性に対する警戒は完全に解けていた。
いや、今は不憫とさえ感じ始めている。
彼女のすすり泣く声があまりにも惨めで、
まるで罪の意識に苛まれているように聞こえたからだ。
「それでも泣き止めないなら・・・・えーと、はい。
友達からお姉さんはこの飴が大好きだって聞いたよ。
僕はこの飴苦手だから、もし良かったら受け取ってよ。」
言いながら手に持っていた杖を地面に置くと、
ポケットから取り出した飴をそっと前へと差し出す。
すると女性は今度こそ大声で泣いた。
やはり、聞くこちらの胸を締め付けるような泣き声で。
暫くして差し出した僕の手に最初に触れたものは、
何時か肩を叩いてもらった時のような温かい指先だった。
良かった・・・・どうやら泣き止んでくれたみたいだ。
何時の間にか手には地面に落とした筈の杖があった。

「あ、あのっ！拾ってくれて、ありがとうっ！」

「・・・ううん、ごめんね、ごめんね・・・・・ありがとう。」

女性が最後に呟いた声は、やがて風に溶け、消えた。

その時だけは何故か、

何も見えない僕にも彼女が居なくなったことが分かった。

そして声が消える間際、彼女が小さく微笑んだことも。

――――――あの日から一年後。

僕は都会の病院で手術を受けることを決心した。

勿論、この目を治す為に。

目の治療を続けようやく僕の目に光が宿った頃、

僕は両親の都合で紅月村へと移り住むことが決まった。

施設を離れることは本音を言えば心細かったが、

移り住むことに同意したのは僕自身の意思もある。

目の治療が済んだ以上、いや、障害が消えた以上、

何もない僕があの場所に居てはならない気がしたからだ。

この目で皆の姿を見る勇気がなかったことに加えて、
実際にこの目でクラスメイトを見ることによって
それまでの大切な仲間達の見方を変えたくなかった。
そして紅月村中学校へ転校し、新たな仲間達と出会う。
そこでの日々も忘れられない思い出となった。
だが、更に数年後――――――紅月村大災害が村を襲う。
奇跡的に生き残った僕は黄昏市の高校を卒業し、
そうして子供の頃から夢だった画家になる道を選んだ。
少年の頃に描いた二つの目的の為に。
その目的の一つが彼女と言えるだろう。
僕は成人を迎えた今でもあの日のことを考え続けている。
彼女は果たして、本当に加害者だったのかと。
いや、彼女は嘗ての僕と同じだった。
社会という名の学校で皆に苛められていただけだ。
そう考えれば彼女の方が不幸だったのかも知れない。

皆を諌める先生もいなければ守ってくれる友達もいない。
居場所もない彼女はそうして奇行に走ったのではないかと。
それならば彼女は寧ろ被害者なのではないだろうか。
あれから口裂け女の噂が僕の耳に入ることはなかった。
これは当時のクラスメイトから聞いた話だが、
あの日を境に黄昏市でも口裂け女の噂は途絶えたと言う。
なので彼女があれから何処へ向かったかは分からない。
ただもし、何時か再び出会える日が訪れるなら。
僕は彼女の絵を描きたいと思う。
目の不自由な僕の為に泣いてくれた彼女は、
きっとあの施設で出会った人達のように綺麗なのだろうから。

（後書き）

お疲れ様でした、如何でしたでしょうか？
これを機に興味を持って頂けたのなら幸いです。

紅月村に関する情報が必要な際はこちらまで。
ｈｔｔｐ：／／ｂｌａｃｋｃａｔｈｕｔ．ｗｅｂ．ｆｃ２．ｃｏｍ／ｈｏｒｒｏｒ／ｈｏｒｒｏｒ．ｈｔｍｌ

それでは、また何処かでお会い致しましょう。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2553e/

FileNo.003：綺麗ナ口裂ケ女

2011年1月20日14時29分発行